

1 今年度の取組目標と方策

(1) 教育活動の取組目標と方策

① 知的探究活動

ア 高等学校における知的探究活動「探究と創造（QC）」への確実な接続を目指して、大泉ソーシャルイノベーションプログラムを中心に中学校段階で探究活動の基礎的なプロセス、必要な知識・ノウハウを体系的に習得させる。

イ 探究活動の中にデータサイエンスや統計処理を取り入れる。

大泉ソーシャルイノベーションプログラムの充実を図るため、積極的に社会課題の現場に訪れるとともに、知的探究部が主催する「課題発掘セミナー」を軸として積極的に外部機関と連携し、様々な分野の専門家を招き、ワークショップ、講演会を月に1回以上実施した。また、授業においても教科横断的な探究活動を心がけるとともに、リサーチクエスションの立て方など、探究の発表形式の基礎となる知識を養うことで、高等学校における知的探究活動への確実な接続を図ることができた。また、異学年交流活動を中学校生徒だけではなく、高等学校を含めて実施したことで、中高一貫教育の特色を推進できた。特に2年目を迎えた「O I Z U M I AWARD」については、保護者だけでなく、本校の探究活動に興味関心を持つ民間企業も数多く来校し、生徒の論理的思考力や表現力、判断力について、非常に高い評価を得ることができた。データサイエンスや統計処理については、外部講師による講演や夏季特別講習において実施した。初歩的な内容であっても中学段階からこのような分野に触れさせる意義は大きい。タブレットの活用も順調に行われている。

② 進路指導

ア 総合的な学習の時間における探究活動とキャリア教育により、自己についての理解を深めるとともに「10年後の自分」をイメージし、その実現を図るために生徒の発達段階に応じた目標を設定させ、高等学校へとつなげる。

イ 生徒の発達段階に応じて自己の能力や適性を把握させるとともに、探究活動を通じて大学や研究所と連携を図りながら主体的に進路を選択する能力を育成し、生徒の希望する進路の実現を図る。

進路キャリア部が中学生にも活用できるよう、進路の手引きを大幅に刷新し、中学校Ⅰ年生から配布したことが大きい成果として挙げられる。入学時から本校の進路指導計画を知り、6年間の見通しをもって目標を設定することが可能となった。生徒に対してはホームルームや総合的な学習の時間等においても自己の進路に対する意識づけを行い、保護者へも保護者会や個別面談を通じて進路情報を提供した。中学Ⅲ年生向け職業講話においては、本校の卒業生から話を聞くことで、生徒がその職業を身近に感じるとともに、自分自身もそのような職業に就ける可能性をより感じるようになった。また、受験を終えた高校生合格体験スピーチを中学生にも視聴させ、受験への心構えを中学生段階から養っていく。

③ 学習指導

ア 英語、数学において少人数指導を実施することにより基礎的・基本的な内容を確実に定着させるとともに、発展的な学習も積極的に取り入れることによりより一層の学力の向上を図る。

- イ ティーチャー・イン・レディネス（T I R）など放課後の学習を充実させることで、生徒の個別の学習課題の解決を図るとともに、家庭における学習習慣の定着を図る。
- ウ 課題発掘セミナーを通して知的好奇心を喚起させ、自発的な学習を促す。
- エ 朝読書や読書月間の推進を通して、豊かな情操を培うとともに落ち着いた学習習慣の確立を図る。
- オ 生徒一人ひとりの学習状況を把握して、生徒・保護者との三者面談を通して協力体制を構築し、生徒の学力の定着と伸長を図る。
- カ 総合的な学習の時間において自ら課題を設定し、調査・研究・発表及び体験的な学習活動を通して言語活動を充実させ、自ら学ぶ意欲を高めるとともに、論理的な思考力や判断力、プレゼンテーション能力の育成を図る。
- キ 全教科でG I G A端末を活用したアクティブラーニング・探究学習を推進する。
- ク 全教科において、教師が「問い」を発することを意識し、探究活動を推進する。

英語・数学において少人数指導を実施し、きめ細かい指導を行いながら基礎的な内容を定着させるとともに、レベルの高い授業も積極的に取り入れ、生徒の学力向上を図った。また、T I R など放課後の学習においては、大学生等の学習支援員を配置するなど計画通り実施し、基礎基本の徹底を図るとともに、できるだけ学習定着度の差が生じないように努めた。探究学習については、全教科で意識的に行うとともに、授業観察シートを改良し、管理職が授業のポイントを確認して担当者にフィードバックすることで、さらなる定着を実現することができた。面談についても、全学年で夏季休業期間に三者面談を実施し、また個別に二者・三者面談を適宜実施した。G I G A端末を活用したアクティブラーニング・探究学習についても、探究活動や授業の中で実践することができた。

④ 生活指導

- ア 月1回の朝礼や道徳の授業を通して、規範意識や生活規律を向上させる。
- イ 生徒相互や生徒と教員間の「挨拶」を励行するとともに、学校生活のすべてにおいて「時間を守る」態度を身に付けさせ、社会生活の基礎と互いに尊重する心を養う。
- ウ スクールカウンセラー、養護教諭、担任の連携を強化し、いじめの早期発見を図るとともに、事案発生時は学校いじめ対策委員会を中心にいじめ防止と対策について検討する。

月1回の全校朝会はオンラインだけでなく、対面でも実施し、全学年の生徒と教員が同じ目線で情報やルールを共有する貴重な機会とすることができた。道徳の特別授業も外部講師を招聘して実施した。「挨拶の励行」については、生徒会からの呼びかけがなされるとともに、各学年でも毎年の恒例になっている「挨拶運動」を行った。スクールカウンセラー・養護教諭・担任との連携を強化しいじめに発展する前段階での対応に努めることができた。いじめの発生件数は「0」であった。校則について、セーターや週休日の登校時の服装規定等の見直しを行った。

⑤ 特別活動・部活動

- ア 学校行事や委員会活動、部活動など、高等学校との連携を通して、豊かな人間性とリーダーとして活躍できる資質を育成する。
- イ 生徒会活動を通して、本校の一員としての自覚と責任感を深めさせる。
- ウ 3年間毎年実施する宿泊を伴う行事を通して、望ましい人間関係を育てるとともに、リーダーシップやコミュニケーション能力の育成を図る。

学校行事や部活動はコロナの影響もほぼなくなり、縦割りの体育祭、全校挙げての文化祭を行うことができた。合唱コンクールも外部ホールを借り、保護者も来場して本格的に実施した。生徒の主体的な行事運営により、リーダーシップを発揮する生徒達の姿が多く見受けられた。行事、特別活動を通じて高校生から学ぶ場面は幾度もあり、中学生は大いに刺激を受けていた。

中学は3学年とも宿泊行事を実施することができた。いずれの学年も、宿泊行事を通じて、仲間と協力し困難を乗り越える経験をして、クラスや学年への所属感や連帯感を深められたことは、教育活動において大きな意義があった。また中高一貫連携事業もすべての事業が計画通り実施することができ、いくつかの事業で好成績を収めることができた。普段なかなか交流がない他の公立中高一貫校の生徒との交流できたことは、本校の生徒たちにとっても大いに刺激になった様子であった。また、作文やエッセイ等の作品応募において受賞する生徒が多く出た。

⑥ 国際理解教育・国際交流の推進

ア J E T・A L Tとの交流やⅢ学年における「国際理解」、希望者による海外語学研修、Ⅱ学年における姉妹校生徒の短期留学受け入れ等の取組を通して、国際社会への興味・関心を高める。

イ 国際交流コンシェルジュと連携を取りながら留学生や学校訪問の受け入れを行う。

ウ Ⅲ学年における希望者によるニュージーランド姉妹校訪問の推進を図る。

I 学年においてはA L Tを積極的に活用して国際社会への興味・関心を高めさせるとともに、ブリティッシュヒルズ英語研修を実施した。また1月に実施した探究発表会では、英語で発表する生徒もあり、英語活用能力の著しい成長が見られた。Ⅱ学年においてはニュージーランド姉妹校からの留学生をホストファミリーとして受け入れるとともに、数日間一緒に学校生活を送ることを通じて、国際社会への興味・関心を大きく高めることができた。また、T G G語学研修において実践的な英語研修を体験することができた。Ⅲ学年においては、夏にニュージーランド海外語学研修を実施し、姉妹校を訪問することを通じて、異文化理解を深め、国際理解教育・国際交流の推進に努めた。

⑦ 健康づくり

ア 校内美化を推進し、健康的で安全な学習環境づくりに努める。

イ 防災ノートや安全教育プログラム等を活用して、危険を予測し、回避する能力や他者や地域の安全に貢献できる資質・能力を育成する。

ウ 養護教諭やスクールカウンセラーとの連携を通して全校的な教育相談体制を充実させ、心の病の早期発見を図る。

生活指導部を中心に校内の美化を推進するとともに、全教員が当初目標に美化指導を掲げ、学年で美化意識を強化することができた。防災教育については、学年集会やホームルーム等を活用して、生徒への防災意識を高めさせることができた。

スクールカウンセラーによるI 学年の全員面談を4月の健康診断時において早めに実施し、学校のカウンセラーによる支援を生徒全員に意識させることができた。思春期の子供の心理をテーマにした保護者向け講習会も、例年通り年に数回実施することができた。保護者や生徒の相談件数が多くなっているが、重要案件については、管理職、担任との連携により情報共有を確実に実施している。

⑧ 食育の推進

ア 保健体育や技術・家庭科等の授業や給食指導を通して食育の推進を図る。

食堂でⅠ、Ⅱ年生合同の一斉喫食をすることができたことにより、栄養教諭による専門的な給食指導が円滑に実施され、食に対する教育が年間を通して行われた。今年度は地産地消の観点から東京で取れた食材を積極的に提供した。また、アレルギーのある生徒に対しても、組織的な対応を行う体制が整っている。

さらに家庭科の授業では、食育の推進に努めるとともに、日本文化プログラムを活用して和食の第一人者による実践講義を実施することができた。

⑨ 学校2020レガシーの推進・体力向上

ア 文化プログラム・学校連携事業実施校として、「日本の食文化」に対する理解を深める取組を推進する。

イ 体育授業、部活動、体育的行事を通して、日常的な運動習慣を身につけさせ、体力の向上を図る。

総合的な学習の時間、道徳や体育の授業等を通してアスリートに関する学習を実践するとともに、2020レガシー教育を推進した。多様性を尊重し、ボランティアマインドをもった生徒の自主活動を支援し、継承していく。

⑩ 特別な支援が必要な生徒への適切な支援体制

ア 障害者差別解消法に基づく合理的配慮を適切に実施する。

イ 必要に応じて「特別支援教室による指導」制度を活用する。

⑪ 自殺対策に資する教育の推進

ア 東京都教育委員会作成資料「SOSの出し方に関する教育を推進していくための指導資料」を参考に生徒理解を深め、未然防止に努める。

「SOSの出し方に関する教育を推進していくための指導資料」DVDを参考に、自殺予防に努めた。発言や行動の変化や体調の変化など、周囲の人の変化に敏感になり、心の悩みや様々な問題を抱えている人が発する周りへのサインに気づいたり、自身が悩みを抱えている場合には教員や保護者に相談したりするよう、適切な機会を設けて呼びかけている。

その結果、担任、養護教諭やスクールカウンセラーへの相談につながっている。

⑫ 校内環境の整備

ア 施設の安全管理を徹底する。

イ 自習室や教室でのコートの保管場所等を改善し、学習環境の整備を推進する。

毎日管理職による見回りを徹底することで、施設の安全管理を行うことができた。とくに台風や大雨時の施設管理を徹底し、速やかな異状発見に努めることができた。また、年次進行で完全中高一貫化に伴う教室配置変更、ロッカー配置変更、下駄箱の配置変更等を行った。定期考査前の一週間は視聴覚ホールを中学生用臨時自習室に設定した。

⑬ ライフ・ワーク・バランスの推進

- ア 「学校における働き方改革推進プラン」に基づき学校の業務改善を推進する。
- イ テレワークの活用と計画的な仕事の進め方により業務の効率化を徹底し、教職員一人ひとりのライフ・ワーク・バランスの実現を図る。
- ウ 水曜日に帰りのHR・清掃を実施しない日を定めることにより会議等の時間設定を図る。
- エ 日々挨拶とコミュニケーションを積極的にとることにより、明るい職場風土づくりを推進する。
- オ 管理職は、毎月、長時間労働者への超過時間の通知と産業医面接の実施により、教職員の組織管理や時間管理、健康安全管理を行う。

積極的にコミュニケーションを取ることによって、明るい職場作りを推進し、教職員が気軽に相談しやすく、休暇を取りやすい雰囲気を作るように努めた。水曜日に帰りのHR・清掃を実施しない日を定めたことで、放課後の時間の有効活用につながった。また、産業医面談を積極的に行い、勤務時間が超過してしまう教職員の勤務状況や健康状況を把握するとともに、休暇の取得を勧めた。

⑭ 経営企画室と一体となった学校経営の推進

- ア 経営企画室と教員組織が円滑に連携を図り、施設管理は予算執行管理を適正に行う。
- イ 施設・設備の点検と維持管理を強化し、安全管理と事故防止に努める。
- ウ 経営企画室は都民サービスの視点に立った窓口業務、広報活動を推進する。

年間を通して、施設管理と予算執行・補正を適切に行った。施設・設備点検を随時行い、破損箇所などを発見した際、速やかに修繕等行い、事故防止に努めた。

⑮ その他

- ア 年間を通した服務事故防止研修会を実施、個人情報の管理、服務管理、危機管理の徹底を図る。

年に数3回服務事故防止研修を行った。机上の整理や個人情報の適切な管理など、日頃から意識をするよう教職員全体に伝えることができた。しかしながら、クリーンデスクが不十分なケースもみられており、さらなる徹底が課題である。

(2) 重点目標と方策

① 6年間を見通した系統的・組織的な探究活動の推進

- ア 本校の柱である探究活動について全教員が協力して推進を図る。
- イ 高等学校における知的探究活動「探究と創造（QC）」への確実な接続を目指した、中学校段階での新たな系統的なプログラム（大泉イノベーションプログラム）を推進する。
- ウ 自ら課題を設定するための原動力となる好奇心を高めるために、様々な活動を行なうことで、探究活動の基礎的なプロセス、必要な知ノウハウを体系的に習得させる。新たに、データサイエンスや統計処理を学ぶことで探究活動の更なる発展を図る。
- エ 各教科における授業・行事等を通して、主体的な学びを行なわせる場面を設定する。

各学年において探究活動を教育活動の柱とすることで、全教員が協力し、組織的な教育活動を展開することができた。特に大泉イノベーションプログラムの推進を通じて、6年間の探究活動の方向性が明確になるとともに、新たな外部機関との連携も大きく前進した。また、練馬区役所をはじめとして、生徒自らが積極的に外部機関と連絡を取り、自身が考えた課題解決策の提案をするなど、机上のアイディアでとどまらず、実際にアクションにつなげる生徒が数多く出てきたことにより、複数の生徒が各種コンテストで受賞したことが大きな成果であった。

② 6年間を見通した系統的・組織的な進路指導

キャリア教育から進路指導へと6年間を見通した組織的な進学指導の実施を適切かつ確実に遂行することで第一希望の進路実現を支援する。

進路キャリア部が中学生にも活用できるよう、進路の手引きを大幅に刷新し、中学校Ⅰ学年から配布したことで、入学時から本校の進路指導計画を知り、6年間の見通しをもって目標を設定することが可能となった。また、キャリアパスポートを活用し、生徒に学びのプロセスを振り返らせ、教員が対話的に進路指導する形を整え、職業観、勤労観を育成していった。また、進路キャリア部が中心となって、学力推移調査の結果分析を効果的に実施できるよう工夫した結果、組織的な進路指導の充実を図ることができた。大学受験結果の分析を中学の学習活動にフィードバックし、また卒業生の6年間の成績分析データを、担任による指導資料として中学の早い段階から活用していくことの重要性を校内でさらに浸透させていく必要がある。

③ 学力のさらなる向上

- ア アクティブラーニング、探究型学習などの指導力向上に向けて教科主任を中心として検討し、6年間を見通した教科指導計画と内容について教科の全教員の共通理解を図る。校外の研修や指導教諭の授業を参観することで「チーム大泉」としての組織的な教科指導力を向上し、生徒の学力向上を推進する。
- イ ICT機器を活用した授業、オンラインでの授業対応を推進することで個人タブレットの活用を図る。アクティブラーニング、探究型学習などの指導力向上に向けて教科主任を中心として検討し、6年間を見通した教科指導計画と内容について教科の全教員の共通理解を図る。校外の研修や指導教諭の授業を参観することで「チーム大泉」としての組織的な教科指導力を向上し、生徒の学力向上を推進する。

コロナの影響もほぼなくなり、従来の対面型の授業が可能になり、主体的・対話的で深い学びを推進することができた。さらに、オンライン授業、オンデマンド、T e a m sを活用した学びを創意工夫することで、個別最適な学びを推進することができた。今年度からの完全中高一貫化に対応し、中高一貫校の特例を活かしたカリキュラムをさらに充実させ、検証していく。校内での相互授業参観も恒常化している。

④ 豊かな心と思いやりの心の育成

道徳や学校行事、部活動など教育活動全体を通じて、豊かな心と思いやりの心を育み、人間性を高める。

教育活動全体を通じて、人権尊重の理念を大切にすることを伝え、生徒一人一人が人権に対する知識や感覚を深め、実践的な行動力を養うことを徹底した。

また、特別の教科「道徳」は、道徳推進教師を中心として、外部研修会での情報に基づく授業を計画し、実施した。また今年度は道徳授業地区公開講座を実施し、外部から講師を招いて、より専門的で質の高い授業を展開するとともに、開かれた学校教育を推進することができた。

2 数値目標

(1) 学習指導

生徒の授業満足度	90%	92.7%
講習満足度	90%	85.1%
定例教科会	12回	12回
教員相互授業見学	3回/年	1回以上/年

(2) 生活指導

部活動地域大会以上出場	4部	2部
部活動入部率	100%	85.2%
行事満足度	75%	96.0%
校内美化	80%	88.5%

(3) キャリア教育

校内模試	3回/年	3回/年
生徒面談	2回/年	2回/年
三者面談	1回/年	1回/年
模試分析会	2回/各学年	2回/各学年

(4) 入学選抜

入選倍率	6.50倍以上	4.17倍
------	---------	-------

(5) 広報活動

学校説明会等来校者	3,300組	1,816組
塾・予備校説明会	12回以上	3回以上
ホームページ更新	700回以上	1121回以上

3 次年度以降の課題と対応等

(1) 学校運営

- ・令和4年度から始まった高等学校の学級減、中学校の学級増に伴う教員定数の激減に備えた組織体制の構築が急務となる。各分掌、委員会業務の効率化を進めていく。
- ・学校評価アンケートの結果によると、学校生活についての生徒の満足度には、一定の評価があったと考えられる。学校行事に関しては、ほぼコロナ以前の活動に戻ることができ、体育祭は全校縦割りで実施し、文化祭では保護者の入場も可とした。合唱コンクールについても外部会場にて、保護者が来場し、実施することができた。宿泊行事も予定通り全学年で実施し、海外語学研修についてもすべて予定通り行った。次年度以降としては、海外学校間交流をさらに充実させ、より質の高い国際理解教育・国際交流の推進に努める。
- ・高等学校の「探究と創造（QC）」の基礎段階としての新しい中学探究活動を円滑に実施することができた。知的探究部と学年・教科がさらに連携して、課題発掘セミナーの充実とと

もに、教科への落とし込みを推進していく。生徒へ刺激を与え主体的活動を促すためにも、学年間の交流をこれからの目的としている。

- ・学習、探究、進路すべての活動にGIGA端末が使用されるようになり、より高度なICT教育が期待される。

(2) 進路指導

- ・進路キャリア部が中学生にも活用できるよう、進路の手引きを大幅に刷新したことで、入学時から本校の進路指導計画を知り、6年間の見通しをもって目標を設定することが可能となった。今後は中学の各学年でさらに手引きを有効活用できるよう取り組む必要がある。また、今年度は高校卒業生の進学実績において大きな飛躍が見られたことを受け、より積極的に生徒のみならず保護者を意識して発信力を高めていくとともに、中学入学前の小学生対象とした広報活動により一層注力する必要がある。それに加え、中学段階が高校卒業時に大きな影響を与えることを広く浸透させるべく、保護者会や講演会等を充実させていく。

(3) 学習指導

- ・コロナの影響もほぼなくなり、従来の対面型の授業が可能になり、主体的・対話的で深い学びを推進することができた。今後は対面型の授業の充実に加え、この数年で得たオンライン授業、オンデマンド、Teamsを活用した双方向型の振り返りの手法などを取り混ぜつつ、個別最適な学びの実現を図ることが課題である。そのためにも、指名制による授業研究などを有効に活用して進学重点校の質の高い授業を見学したり、予備校での研修に積極的に参加するなど、教員一人一人が授業力向上に努め、生徒の進路実現に大きな力となれるよう研鑽に努めていかなければならないと考える。

(4) 生活指導

- ・生徒の挨拶励行については一定の成果を得たと言えるが、未だ「教職員から挨拶がない」という声も聞こえる。教職員も自覚的に取り組んでいくべきである。また、校内美化については学校評価アンケートのポイントが上昇した。引き続き強化目標として設定する。
- ・中学において、年々不登校生徒が増えている傾向がみられる。外部機関と連携しながら生徒の指導にあたっている担任もいるので、ノウハウに関して学年を越えて共有できると良い。
- ・校則の見直しを実施し自主自立、規範意識の醸成に引き続き努めていく。制服については今年度より女子のスラックスを導入したところ、何名かの女子生徒が着用するなど、大きな問題なく導入できている。また、セーターや週休日の服装規定について変更した。
- ・自主自立の観点から、次年度より食品自販機の使用を中学生にも部分的に解禁する。貴重品の取扱い等、事前指導を十分に行っていく。

(5) 道徳指導

- ・道徳推進教師を中心に評価方法や授業計画を研究する中で、中学担任団の指導への理解を深めることができた。引き続き取り組みを行っていく。